

山中一輝「日本における労働生産性と IT の有効活用」

日本の企業は情報処理技術 (IT) を有効に活用していないために労働生産性が低い、という問題意識からこの論文はスタートしています。筆者が卒業後に IT 関連の職種に就く予定であることが、こうしたテーマ設定に深く関連しているのかもしれませんが。

こうしたテーマを扱う際に、マクロなレベルでの労働生産性 (国全体で見た、1 人あたり GDP) と、ミクロなレベルでの労働生産性 (個別企業における収益性) とを整合的に結びつけて論証するのはそう簡単ではありません。マクロな労働生産性の要因は IT に限らず多様であり、また IT といっても極めて幅広いので、限られた紙幅の論文で検討するには限界があります。ここでは、マクロな労働生産性の問題よりも、むしろ個別企業の業務効率改善の問題に視野を限定して考えたほうがすっきりするかもしれません。

この論文で興味深いのは、筆者がインタビュー調査した積水化学工業株式会社の Microsoft Dynamics AX というソフトウェア導入時の事例です。筆者はこのソフトウェアの導入事例を「日本企業が IT を有効活用するための成功事例として考える」と位置づけ、ソフトウェア導入時にトレーニングとマニュアルを用いることが、IT を有効活用する工夫だと結論付けました。積水化学工業でのインタビュー調査によって、現場における IT 活用の具体的なイメージを結ぶことができ、また地に足のついた議論ができるようになったのは、とても良いことだと思います。

ここで取り上げた事例は、IT が雇用を奪うといったタカ派的な例ではなく、IT が従業員の作業効率を高めるといったハト派的な例なので心配ありませんが、労働生産性の向上を極端に突き詰めれば、雇用を最小化して人件費を圧縮することになり、失業という負の影響が社会問題化する恐れがあります。そのため、IT の活用と、雇用の維持拡大をどう両立させていくかを深く考察することが望まれます。